巻頭言

不確かな状況の中で

心理臨床センター副センター長　興　津　真理子

大規模な災害や事故が起こった時,我々がその全貌や詳細を知るのは,多くの場合少し時間が経ってからとなります。新型コロナ感染症の広がりはようやく少し収まったように見えますが，これで収束するのか，第〇波と呼ばれる拡大がまたやってくるのか，私たちの生活は以前とはどの程度異なったものになるのか，経済的打撃からの回復はどうなるのかといった，不確かで曖昧さに溢れた状況に持ちこたえていかなくてはなりません。

そのような中で心理臨床に携わる私たちが最も懸念しているのは，この未曽有の事態が人の心に及ぼす影響です。本学心理臨床センターでは，感染拡大時には対面でのご相談を制限しつつも可能な限り実施し，オンラインでのご相談も維持してまいりました。その結果，利用のお申込みが多く，こちらが一度に受け入れられるご相談数を超えることもありました。お困りの時に選択肢に入れてみようと思える相談の場になっていることをうれしく思う反面，コロナ禍が直接的，間接的に影響し，不安や心的苦痛を感じておられる方が増えていることを感じております。しかも，現状で見えているのは全貌ではなく，中長期的な影響が明らかになるにはもう少し時間を要することと思います。

こうした状況にあり，本学の心理臨床センターは，利用者様の心的苦痛の予防や改善に役立ち，そのための技量を備えた公認心理師，臨床心理士を育成していくことにますます努めていく所存でございます。その取り組みの一端をお伝えする論文集を，今年度も発行する運びとなりました。必要とされている方に「希望」をお届けできる臨床を行っていけるよう，一層努めてまいります。これを手にしてくださる方々には，是非とも今後とも我々の働きを見守り，ご指導いただければと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。